

発掘調査の概要

高松塚古墳（飛鳥藤原第137次）

平成16年10月から、特別史跡高松塚の発掘調査を実施しています。この調査は、「国宝高松塚古墳壁画」の恒久保存対策の一環として、墳丘の現況が壁画の保存にどう影響を及ぼしているのか、また古墳築造当初の墳丘の規模や形態、構造の解明を目的としたものです。調査は、文化庁の委託を受けた奈良文化財研究所が、奈良県教育委員会（橿原考古学研究所）、明日香村教育委員会と共同で、平成17年3月までの予定で実施します。

高松塚古墳壁画は昭和47年に発見され、飛鳥ブームや考古学ブームをひきおこしました。この貴重な壁画を発見時の姿で保存するために、昭和51年に保存施設が完成しました。それから30年近くが経過した現在、壁画の経年変化による劣化が社会問題化しています。最新の科学技術や学術成果を駆使した壁画の保存対策の策定が急務ですが、そのためには墳丘の現況把握と、再整備に向けた学術データの収集が欠かせません。

高松塚はこれまで径18m、高さ約5mの円墳と推定されてきましたが、その規模や形状は必ずしも確定したのではなく、近くにある中尾山古墳のように、八角形墳になる可能性もあります。

発掘調査は、壁画の保存に悪影響を与えぬよう、慎重な配慮のもとにおこなわれています。降雨時の雨水の浸透を防ぎ、直射日光による乾燥や温度上昇を抑制するために、墳丘部をすっぽり覆う巨大な仮設覆屋を建設しました。覆屋内部の調査は、雨天でも調査が可能のため、調査員はやや疲労気味ですが、連日訪れる多数の観光客に見守られながら、調査は順調に進んでいます。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 松村 恵司）



墳丘部の発掘調査風景